ゆうかり放送委員会提供

# ゆうかりに乾杯

## 第 140 回放送の概要（2018 年 12 月 22 日放送）

パーソナリティ
たろう
（佃　由晃）
なか
（中嶋邦弘）
かりん
（妹尾優香）
くらら
（河野真紀）

ミキサー
門ちゃん
（門田成延）

会計
小山俊則

相談役
わだかん
（和田幹司）

### 1．ゲストコーナー（1）龍谷大学社会学部教授　脇田健一さん（64 陽会）

**（1）兵庫高校転入まで**

神戸生まれであるにも関わらず、兵庫高校に転入生として入ったのは、お父さんが船舶の内燃機関関係の会社に勤めていたためで、港町を転勤で転々とした子供時代を過ごしたから。下関、小倉、博多、広島と転校した。幼稚園は３つ、小学校は３つ、中学校は１、そして高校は地元広島の県立皆実高等学校に入ったが、親の転勤で兵庫高校の編入試験を受け転校した。どこかに出身は神戸というイメージが残っており、編入試験を受けるため新神戸駅に着いた際、目の前に坂と海が見えた時「わが町、神戸だ」と感じ、自分の生まれた町に戻ってきたと思った。引っ越し先の家が北区であったため、地元の高校は兵庫高校ということで受験した。試験に受からなかった場合は、両親からは、広島の元の高校に戻って下宿しなさいと言われていた。

**（2）兵庫高校時代**

広島県立皆実高等学校に入学した当初、ひょろっとした体形がコンプレックスだった。ただし、球技等についてはセンスがないので、走っていれば体を鍛えられると思い、陸上競技部に入部した。兵庫高校でも、引き続き陸上競技部に入部した。選手層の薄い皆の嫌がる 400m ハードルを選んだ。「お前は走っているのか」と言われるくらい遅かったが、なんとか県大会の予選までは進んだ。当時は、砂漠のようなグランドを走る厳しい練習だった。練習の結果、吐血して体を壊し部を辞めることになった。子供の時からヴァイオリンを習っていたので、陸上部を辞める頃、同級生の岡野雅昭君から、「所属している吹奏楽部で自分が弾いているコントラバスの人が足りない」と言われ、エキストラでの出演を依頼された。それほど難しい曲ではなかったので、自分でもなんとか弾くことができた。

当時の兵庫高校には、今ではあり得ないような授業をされる先生がおられた。丁寧に板書がきをせずに、

チョークが飛んでくるような勢いで黒板に字を書いたり、教科書そっちのけで授業を進めたり。物理の先生は力学の数式を黒板に一杯書いて、こちらはさっぱりわからなくても、どうやという顔をされていた。英語の伴和夫先生の授業では、一学期はドクター・ルーサー・キングのI Have a Dream.で知られる有名な演説を、二学期はアンネの日記を教材に使って勉強した。強烈な印象として残っている。伴先生自作のガリ版刷りテキストで勉強した。すごい時間をかけスピーチを分析的にどこで韻を踏んでいるかなど丁寧に教えてくださった。伴先生は、ドクター・ルーサー・キングの演説については、生徒一人一人がテープを持っていくとダビングしてくれた。「いつ日か白人の子たちと黒人の子たちが一緒に・・・」という有名なフレーズがある。40 年経った今もまだ記憶に残っているのは、何か自分にとって意味があったし、伴先生のお力だとも思う。

小さい時から転校に転校を重ねてきたので過去を振り返らずにきた。行く先での新しい人間関係をどんどん作ってきた。そのようなこともあり、卒業後、母校のことを考えることはあまりなかったが、偶然から母校との繋がりが復活した。今の兵庫高校の PTA 会長の川谷逸樹さんと仕事の関係でたまたま知り合い、仕事の後、一緒に懇親会で酒を飲んでいた時、お互いに兵庫高校出身であるとわかった。その後、Facebook でも繋がり、今年５月ポートアイランドホテルで行われた 110 周年記念同窓会に出席するように誘われた。参加してみると、あれよあれよと同級生とも繋がるようになった。年をとると昔が懐かしくなり、今日の放送にも出演することになった。

**（3）関西学院社会学部・大学院時代**

子どもの頃、文化人類学、異文化研究に憧れていた。社会学部に異文化の社会組織、家族/親族の研究をされている人類学の山路勝彦先生がおられ、そのゼミに所属して勉強した。普段は輪読だった。今の学部学生だと「これはアカデミックハラスメントか」と言いかねないほど難解なテキストを読まされた。そのテキストとは、レヴィ=ストロースというフランスの文化人類学者の『親族の基本構造』という専門書だった。ゼミの実習では三重県の離島にある漁村で家族の調査を行なった。その漁村では、直系家族とは異なり、子供に母屋を譲り親は別の所帯を持つ家族の仕組み（隠居制家族）がかつて存在していた。そのことについて、他のゼミ生たちと一緒に聞き取り調査を行なった。

その当時、ゼミの山路先生は台湾先住民のアミ族、タイヤル族の社会を研究していた。特に、そのような先住民の方達が、どのような親族、家族の組織を持っていたのかを丹念に調査されていた。夏休み、冬休みには必ず台湾に調査に行かれていたが、「お前たちも行くか」と言われて、ゼミの中で 3 人だけが手を挙げて出かけることになった。先生は自分は先に行っているので後から自分たちで来なさいと言われた。単位にならず費用も出ない貧乏旅行だった。元々日本が植民地にしていたところで、現地の年配の人は日本語がしゃべれるので日本語で調査ができた時代だった。

社会学には、アンケートでデータをとり統計学的に計量的に分析する手法の人と、現地に出かけ関係者からインタビューで話を聞く質的調査に取り組むタイプの人がいる。私は、きちっとした仮説検証型の統計的な分析よりも、現場のごちゃごちゃしたフィールドの中でワクワクしながら調査するのが好きだった。このような傾向は、小さい時から国内の違う文化の場所を転々としたことと、どこかで繋がっているのかもしれない。

学部を卒業した後は、大学院の社会学研究科に進学し、学部の続きの研究をしていた。しかし、学会の中でも注目される若い勢いのある先生が異動して来られ、随分影響を受けることになった。論文の書き方、作法を教わった。先生は、環境問題を社会学の立場から研究する環境社会学を新しく立ち上げられた。そして新しい学会を作るのでその事務をやるよう指示され手伝った。そこから、環境問題の研究が自分の中心になっていった。大学院では国内の環境問題をテーマに、フィールドワークをしながら社会学的に研究していくことが、次第に自分の本筋の研究のスタイルになっていった。ただし、当時はまだ琵琶湖の環境をするという状況ではなかった。

**（4）阪神大震災時**

大学院を出た後、滋賀県庁に入った。そして、「湖と人間の共存」というテーマの滋賀県立琵琶湖博物館の開設準備室に勤務することになった。その時に震災が発生した。準備室の職員をはじめとして県庁の職員は、被災地の周囲にある近隣の自治体の職員として被災地に派遣された。私の場合は、不思議なことに母校である兵庫高校の災害現場に派遣された。学んだ校舎は建て替えられていたが、新しい校舎の廊下を歩いていると隙間から空が見えて驚いた。当時まだ残っていた昔の図書館で寝泊まりしながら、被災者に援助物資をカウンター越しにお渡しする仕事を行なった。校庭はテントだらけで教室も被災者で一杯だった。学生時代校門の前にあった駄菓子屋、室内商店街など一切がなくなっていた。空襲にあった海外の街や戦場を TV で見ることがあるが、それと同じような風景が母校の前に広がっていた。人々はテントから通勤し、大変な状況の中でも自分の役割を放棄せず働いておられることに驚いた。

**2．ミュージック：津軽三味線奏者　岡田修さんの「空へ」**

**3．ゲストコーナー（2）**

**（5）琵琶湖博物館時代（開設準備室 1991～1996、主任研究員 1996～1998）**

3 ケ年の大学院博士課程修了後も就職先がなかった時（オーバードクター。28 歳で結婚し子もが産まれていた）、大学での非常勤講師や、塾の講師をしていた迷いの時期に、環境問題の研究会である研究者（元滋賀県知事の嘉田由紀子さん）から、滋賀県庁で環境、琵琶湖をテーマにした博物館を作るので採用試験を受けてみないかと言われた。当初、就職先に博物館の選択肢はなかったが、研究職でもあり大学とは違った経験が出来ると言われ、試験を受けることにした。結果、採用され地方公務員になった。現在は、元滋賀県知事として知られる嘉田さんだが、その当時は、琵琶湖研究所の研究員として勤務されていた。琵琶湖研究所は、国会議員で大蔵大臣にも就任された武村正義さんが、滋賀県知事をされていた時代に設置した研究機関だ。この琵琶湖研究所は、琵琶湖の赤潮などの環境問題を科学的に解明するために設置されていた。おそらくこの時の嘉田さんからの誘いがなければ、私の人生は全く違ったものになっていたと思う。

博物館の開設準備室は基本的に役所の一部なので、大学とは全く違う世界であり、ためらうことが多かった。博物館は「物」資料を収集し保存展示分析するが、社会学は社会関係を分析するので「物」がなく、同僚の考古学の先輩からは「社会学は明確な物資料のないあわれな学問」と皮肉を言われた。環境は湖と人間の関係など関係の問題でもあり、その関係が変わっていくことで環境問題が発生する。「湖と人間の

共存」という「関係」をテーマにした博物館であったので、社会学を専門とする脇田さんでも学芸員として役に立てる場があった。色んな分野の専門家が集まり、それぞれの学芸員が展示を担当した。脇田さんはＣ展示室の担当だった。この展示室は、高度経済成長期以降に、それ以前と暮らしと身近な環境、琵琶湖との関係がどのように変わっていったかがテーマだった。環境問題が発生していく背景を理解できる展示室で、入っていくと原寸大のかつての農家が移築され、水道が通る前の身近な環境を汚染しないように、人々は水をどのように利用していたかを、農家の暮らしの中から理解できるようなっている。当時としては信じられないような展示手法（嘉田由紀子さん担当）を取り入れることで、関係を実感する展示が出来たように思う。

Ｃ展示室
琵琶湖博物館 HP より転載

準備室のため、研究はなかなか出来ない環境だった。同窓生たちは、大学で職を得て通常の研究者のスタイルで働いているわけだが、地方公務員として開設準備に時間を取られることに精神的焦りは確かにあった。しかしそこで異分野の人たちと学際的な研究に取り組んだことが、大きな転機となった。琵琶湖博物館ではそのような学際的な研究を総合研究と言っていた。館長であった生態学者川那部浩哉さんは、環境をテーマにした総合研究を進めるように強く指導された。そこでは、色んな専門分野の人たちのいいところ、成果をうまくデザインしながらつないで一つの研究プロジェクトにまとめていく経験をした。社会学を専門にしていると本当に視野が狭い細かな研究ばかりになってしまうが、博物館勤務では視野が一気に広がり、学問を自由に行える機会を与えていただいた。

博物館開設以降近隣の京都大学の生態研究センター他、その後色んな自然科学系の人たちとの学際的・文理融合と言われた大きな研究プロジェクトが始まり、そこに参加することになった。そのような研究をまとめていく仕事は、研究者として自分なりに成長するためのトレーニングになった。自分は、異なるものの価値をつないでデザインしていくコーディネートしていくことに向いているなと思った。一つの学問では「総体」がなかなか見えない。環境問題といっても色んな側面があり、それらの側面を関連付けながら考えていくためには色んな学問分野の協力・協働が必要で、ただばらばらに専門分野ごとに研究を進めて、その成果をホッチキスで綴じてもいい研究にならない。それぞれの分野の研究成果が相補うような関係を、どうやってプロジェクトの中に作っていけばいいのか、そのことを考えるための経験を積むことが出来た。

### （６）岩手県立大学総合政策学部時代（1998～2004）

琵琶湖博物館開設準備室と琵琶湖博物館に７年間勤務した後、新しく開設された岩手県立大学の総合政策学部に異動し、社会科学系の人たちが中心ではあったが、異なる分野の方達とのコラボレーションを考

えるチャンスを得た。社会学部はクールに社会現象を分析していくわけだが、政策学部はそのような分析を越えて解決に向けたところまで踏み込む必要がある。県立大学であることから岩手県のシンクタンク機能を県庁から求められていたので、色んな人たちとの具体的に問題解決をしていくための政策論、現場と学問をどのようにつないでいくかを真剣に考える場になった。

元々はまちづくりに関心を持っていたわけではないが、県庁所在地の盛岡市(大学は離接する滝沢村にあったが)では、盛岡の街並みや景観保全に取り組んでいる市民団体との交流が結構あった。現場に入り色々考えることが総合政策学部での経験になった。市民とも議論し、社会関係の他の分野の人たちとも議論し、問題を解決する方法まで踏み込んだ。これは社会学の中だけで研究しているのとは違う経験だった。

**（7）龍谷大学社会学部　助教授（2004～2006)、教授（2006～）**

琵琶湖博物館や岩手県立大学で現場に関わり、問題解決思考を自分の中に培っていった時に龍谷大学に赴任した。博物館時代から琵琶湖をフィールドにし自然科学とタイアップした文理融合の研究を継続してやってきていたので、龍谷大に戻ってきたとき自分は社会学者ではあるが、ピュアな社会学者しかいない組織の中で物足りなさを感じた。例えだが、水が澄みすぎているので、もう少し濁った水の方がいいと思った。龍谷大学社会学部の理念は現場主義。自分なりの現場主義をもう少し徹底しようと思い、大学のある地元の大津や滋賀にこだわり、実習や地域連携を積極的にやっていくことを赴任直後に固く誓った。

当時文科省が全国の大学を対象に実施していた**「現代 GP（Good Practice)」**に社会学部として応募した。これは、特に優れた教育プロジェクトを選定して、財政支援を行うもの。私たちの社会学部では、**「大津エンパワーネット」**という企画をたて、学生と地域の皆さんが連携しながら地域の課題を発見し、その課題を少しでも解決して成果を共有していく、発見-解決-共有のプロセスを進めていく地域連携の教育プログラムを立ち上げた。まちづくりの現場に学生が入っていく、まちづくりのインターンシップのような形の教育プログラムである。このプログラムは単位も評価も与え、社会学部の中でまちづくりコーディネーターという資格を卒業時には与えるものである。

カリキュラムではなくゼミ活動として取り組んだのは、**「北船路米づくり研究会」**だ。2009 年 NTT ドコモの社員の方から、ドコモの技術をまちづくりの活動の中で活かせないかという相談があった。まちづくりは夢がないところには起こらない。「こんな風になったらいいな」「こんことができたらいいな」と妄想を語り合うことから始まる。その時も、私の妄想を語った。その後、社会の方から再び連絡があり、自分は実は兼業農家で、自分の住んでいる村の活性化を龍谷大学の学生と一緒にやりたいのだがと、相談があった。その村は大津市内にある。旧志賀町の比良山系蓬莱山の麓にある棚田の農村である。棚田からは大津の市街地から伊吹山まで、琵琶湖が全面に見えるレークビューの美しい風景を眺めることができる。ということで、集落の名前である北船路（きたふなじ）から**「北船路米づくり研究会」**を立ち上げた（2010～2016)。

きれいな山水が流れ込む一番上の棚田に、学生と一緒に米作りをした。その棚田では、米粒はあまり大きくならないが、味の濃いおいしい米が収穫できた。コメは環境条件が厳しい方が味の濃いものが出来る。昔ながらの手植えをしたが、兼業農家である NTT 社員の人は待ちきれず半分ほどの面積については田植

え機を使って苗を植えてくれた。最近は農業の６次産業化というが、生産した米に付加価値をつけるため、コメを灯油を使って機械的に乾燥させるのではなく、コンバインで刈り取ったモミをムシロの上で天日干しにして乾燥させる工程を踏まえたコメを作り、**龍大米**（コシヒカリ）として町中で販売した。そうすることで農村と町をつないだ。野菜作りは難しいので、プロの高齢の自給的農家の方が有機で丁寧に作ったものを町中で販売し、北船路のことを知ってもらうようにした。買ってもらうだけではなく現場に来てもらうための都市と農村の交流イベント「**かかし祭**」を実施していた時、1658年万治元年創業の家族経営の小さな酒蔵、平井商店の奥さんがたまたま交流イベントに参加されており、こんな景色のきれいなところで出来たお米でお酒が出来たらねと言った一言を学生が農家に伝えことで、北船路で酒米を作ることになった。学生たちが町の酒蔵と酒米を作る農家とをつないだ。できた日本酒が「**純米吟醸酒　北船路**」、「**純米吟醸無ろ過生原酒　北船路**」である。大津市商工会議所の選定した大津名物の一品にも選ばれ、ラベルもポスターも学生がすべてデザインした。

脇田健一さんブログより転載

北船路米づくり研究会は学生には大きな経験になった。大学は先生との縦の関係、友達は横の関係になるが、それとは違う斜めの関係と言えるどう相手をしてよいかわからない町のおじさんおばさんたち、農村のおじいさんたちなどとコミュニケーションすることは、今の学生にとっては大きな経験になる。価値観もライフスタイルも違う人とコミュニケーションして、何か一つの事業（酒造り）を進めていくことは、卒業後も社会人として生きていく上で重要な経験になる。

（タロウの感想）

本日は脇田さんの話を伺い、社会学の一端に触れることが出来ました。ブログを拝見すると、学生に対しては大学での学びについて安心して判断できる材料が十分提供され、また我々のような第３者も社会学についてそして脇田さんのこれまでの取り組みや思いが十分伝わってきました。

脇田さんのゼミや講義を受けた学生は、社会人になってもすぐに役立つ問題解決型のスキルが身につくと思いました。

## 4. こぼれた話・こぼれなかった話：播磨テクノポリス特色建物群

（１）播磨テクノポリスは、兵庫県の西、岡山県に隣接する西播磨の豊かな自然環境のなか、「人と自然と科学が調和する高次元機能都市」をトータルコンセプトに、産・学・住・遊の機能を総合的に備える新しい街です。今、世界最高性能を誇る大型放射光施設など 21 世紀の科学技術の発展を支える学術研究機関群や関連産業が立地、快適な居住環境や余暇機能など近代的かつ新鮮なアーバンデザインが窺える未来都市となっています。

（２）播磨テクノポリスの「アーバンデザイン計画」には、建築家の磯崎新氏、安藤忠雄氏、遠藤秀平氏、渡辺真理氏、ランドスケープアーキテクト（造園家）のピーター・ウォーカー氏らが参画して、先進的な都市機能と景観の両面から一体的にデザインされた都市になっています。
（３）昔から、建築や都市設計などの専門誌や研究者が、撮影許可を求めて大勢やって来ています。例えば、街の光るストーンサークルが囲むセンターサークルや日本庭園、大きな築山のある中庭などはピーター・ウォーカー氏。安藤忠雄氏の街中の航空母艦のような小中学校やヘリポート、磯崎新氏のホテル付きの科学技術支援センターや大きな吹き抜けのある高層マンションや湾曲マンションそして街の商業行政が集中するプラザ、遠藤秀平氏のウッディな環境体験館やもったいないぐらいの公園内施設など。

（４）ほかにも、デザインを誇らしく主張している和風住宅や輸入住宅、病院や教育関係の建物群、sp-8 などの研究施設群、などなど、正にアーバンデザインの見本市といったところです。あなたも、播磨テクノポリスに行かれたら、「未来都市」を垣間見れることになるでしょう。

## 5. エンディング

（脇田さん）
北船路米づくり研究会は 2016 年度で活動は終えたので、今後新たに町との連携プロジェクトを立ち上げたいと思っている。大津市郊外の新興住宅地が高齢化が進み、高齢化に付随して発生する問題を緩和、解決のため**「学生まちづくりラボラトリー」**の企画を、大津市、龍谷大学と新興住宅地と連携して進めている。

（クララの感想）
地域のママの繋がりを作ったり、こどもに色んな体験活動をさせてあげたいという取り組みとして、公園でプレーパークをしようという「こどもフェスタ」の企画を続けている。その繋がりから兵庫区役所の大学生サミットに参加した時に大学生のアイデア、発想力の高さ、大人と違う視点からの発想、自分たちが動きますという意欲的なところが凄く感じられ、龍谷大学が学生に機会を作っているように縦の関係、横の関係、更に斜めの関係という地域の方と一緒に自分たちのアイデアが生かせる場があることを学生が感じられることは、就職前にすごくいいと思う。あきらめる子が多くなっている気がしている。

放送音声は、FMYY の HP および「ゆうかりに乾杯」の HP で視聴いただけます。
https://tcc117.jp/fmyy/?cat=51　　http:// yukari-ni-kanpai.sakura.ne.jp/